



Title	『北海道主要樹木圖譜』成立過程の再検討
Author(s)	加藤, 克; 中村, 剛
Citation	札幌博物場研究会誌, 2023, 1-27
Issue Date	2023-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90679
Type	article
Note	この資料はサイト「札幌博物場研究」 http://www.fsc.hokudai.ac.jp/mk_hunhm/index.html からもダウンロード可能です。
File Information	HUNHM_magazine_2023_01_27.pdf



[Instructions for use](#)

『北海道主要樹木圖譜』成立過程の再検討

加藤 克*・中村 剛*

*北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

はじめに

1920（大正9）年から1931（昭和6）年にかけて北海道庁から出版された『北海道主要樹木圖譜』は、宮部金吾・工藤祐舜による詳細な植物学的解説と画工須崎忠助による精細かつ美しい図から「樹木図譜中の名作」〔覆刻『北海道主要樹木図譜』編集委員会1984あとがき〕と評される。『北海道主要樹木圖譜』（以下、本稿では『北海道主要樹木圖譜』全3巻および再版1巻をあわせて『圖譜』と表記）は、1984年に覆刻されただけでなく、1986年には普及版も刊行されたことから、研究を目的とした利用だけでなくボタニカルアートの優品としても広く認知されている。また、『圖譜』第1巻の在庫と原版が関東大震災によって消失したことや、著者の一人である工藤が『圖譜』初版完成からわずか1年で急逝したこと、須崎も2年後に亡くなっていることなどの刊行の背景にある歴史もまた、人々の関心を引き付けてきた。

『圖譜』刊行の経緯については、宮部・工藤による緒言（1巻1輯）、著者跋文（3巻28輯）および覆刻『北海道主要樹木図譜』解説〔辻井1984〕（以下覆刻解説と表記）に詳しいが、本稿は以下の3点から、従来認識されてきた『圖譜』の刊行経緯について再検討を試みるものである。第1点は、覆刻解説執筆ののち、宮部家から宮部金吾の遺品が北海道大学植物園に寄贈され、関連資料を利用して考察できるようになったことがある。特に、秋月〔2010〕によって宮部の手元に保存されていた書簡の目録がまとめられ、簡便に利用できるようになったことがあげられる。第2点は、別稿〔加藤ら2016〕で一部を紹介した須崎の自伝が確認されたことである。これらの新情報によって、『圖譜』の刊行経緯および背景に再考の余地があることが示唆された。第3点は、北海道大学植物園所蔵の『圖譜』原画（以下「原画」と表記）といわれている資料の存在が挙げられる。覆刻解説では、『圖譜』の原画は1枚も確認できないとされているが、後述するように、植物園所蔵資料は『圖譜』と非常に深い関係にあるものであることは疑いない。ただし、「原画」と『圖譜』そのものには若干異なる部分もあるため、植物園としては、「原画」の存在を報告する上では、慎重な調査が必要であると考えてきた。今回、『圖譜』の成立過程の再検討にあわせ、植物園所蔵「原画」についても詳細に検討し、その関係性を示すこととした。

1. 『北海道主要樹木圖譜』と須崎忠助

本章では、再検討の対象となる『圖譜』刊行経緯と画工須崎忠助の経歴について確認する。

覆刻解説によれば、北海道庁は1913（大正2）年に『北海道主要樹木圖譜』の刊行を企画し、東北帝国大学農科大学教授宮部金吾、助教授工藤祐舜にその作成を委嘱、作画を北海道庁技手須崎忠助氏に命じた。『圖譜』は、1920年から1931（昭和6）年までの12年間にわたって刊行されたが、その間の事情については、宮部が1932年の工藤急逝に際して著した「故工藤祐舜氏の傳」〔宮部1932〕にあるように「北海道庁の嘱託に依り、多年其編纂に従事し居たる北海道主要樹木図譜を愈々三秀舎より出版に決定、予約を以て其第一輯を發行す。原図は須崎忠助氏の精巧なる写生により、解剖図は君（工藤：引用者注）の手になりたるものを、須崎氏、生品に依り着色せるものなり。又其本文の最初の原稿は君の手によりて作成せられ、余がこれに訂正増補を加へたるものなり」として、工藤の貢献の大きさを示している。あわせて、覆刻解説では「その構成、編集は厳密、精緻をきわめた。博士（工藤：引用者注）の性格にもよったであろうが、説明もまた完璧に近い。図についても須崎氏への注文は厳しく、「自然の色を出さなければ駄目だ」として再三にわたって描き直しが命ぜられたようである」として、工藤主導の下で『圖譜』の調製が進められていたとされる。

一方、『圖譜』著者跋文及び再版緒言に記されているように、1923年に発生した関東大震災により、出版社である三秀舎に保管されていた1巻（1-10輯）、2巻の一部（11-12輯）の在庫及び「クハノキ、ホノキ、カツラ等ノ原図」が消失した。この被害により1巻の販売、頒布に問題が生じたため、全3巻完結後の1932年に、1巻については初版の石版を改め、三色版によって再版されている。なお、覆刻解説においては、震災で消失したものは第1巻全10輯の在庫品とその原版、クワノキ、ホオノキ、カツラの原図とされており、記述に若干の相違がみられることに注意が必要である。

覆刻解説では須崎忠助の経歴についても紹介されているが、その人となりを知る記録は乏しく、遺族や須崎の活動時期に北大

植物園に勤務していた原秀雄らからの聞き取りに基づく内容が記されている。その内容を以下にまとめる。

須崎の経歴は、1866（慶応2）年に東京で生まれ、1897年東京大林区署雇、1909年長野大林区署を経て1911年に北海道庁技手となったのち、1924年に依願免本官というものである。北海道庁では、林務関係の作図を担当していたようだが、『圖譜』の作成に関わるようになってからはこれに専心していたようである。『圖譜』の画業は、当初北海道庁内で行われていたが、スケッチの必要上、植物園の一室に作業場が置かれることとなり、園内で採取した素材のスケッチがなされたとされる。『圖譜』図版ができ上がると、順次工藤の元へ持ち込まれ、形状や色に対する厳密なチェックを受け、再三にわたって書き直しが求められたという。なお、『圖譜』に記されている種子からの発芽、開花、結実に至るまでの各段階を描くための発芽試験は当時の植物園では実施されておらず、北海道庁や植物園以外でもスケッチが行われていた可能性が高いが、その詳細は不明とされる。

以上が『圖譜』及び覆刻解説の記述に基づく刊行過程と須崎忠助の経歴である。覆刻解説は現時点における『圖譜』に関する唯一の解説であることから、『圖譜』を紹介する記述の基盤となっている。しかしながら、『圖譜』完成から覆刻『北海道主要樹木図譜』の刊行までは半世紀を経過しており、上述したように宮部の記述と覆刻解説との間には若干であるが相違点が確認される。また『圖譜』や須崎に関する記述は関係者からの聞き取りに基づくものが多く含まれており、その裏付けとなる資料が提示されているわけではない。次章以降において、『圖譜』関係者が残した記録、当時の関連資料を利用しながら覆刻解説の記述について再検討することとしたい。

2. 須崎自伝にみる『圖譜』

本章では、『圖譜』の画工である須崎忠助自身が書き著した自伝に基づいて、その経歴と『圖譜』とのかかわりについて確認する。利用する資料は、国立国会図書館に所蔵されている『修養之近道』[須崎 1929]に含まれている須崎忠輔著「私くしの経路」⁽¹⁾（以下須崎自伝と表記）である。『圖譜』の画工である須崎とは名前の漢字が異なるが、記述の内容としては須崎忠助の経歴を示すものであること、また、北海道大学大学文書館に所蔵されている農学部植物学教室旧蔵キノコ図は、須崎が大学関係者の依頼に基づいて描いたものと考えられるが、その作者として「須崎忠輔」の記述が確認されることから、1920年代末には須崎は「忠輔」という表記を利用していたものと考えられる⁽²⁾。「私くしの経路」には須崎の幼少期からの記述や家族に関する記述も多く確認されるが、本稿では『圖譜』に関わる部分のみに注目して内容を介绍することとする。記載されている事柄の多くには年次の記載がないため、覆刻解説の記述と照合しながら確認してゆく必要があるが、須崎が北海道庁に就職するまでの経緯はおおむね以下に示すようなものである。

須崎は、幼いころから父親の勧めもあり絵画に親しんでいたという。東京大林区署雇となった際には「昔習った絵画が実用の方面に復活して、三十八年まで専心に従事」と記されていることから、東京大林区署においては作画を担当していたとみられる。その後、1909年に行政整理の一環として長野へ転勤することとなったが、その2年後に長野への転勤に際して推挙してくれた恩人からの北海道へ移動してくるよとの電報を受け取り、北海道庁に勤めることになった。ここまでの経緯については、覆刻解説の記述との間に相違は確認されない。

北海道庁に勤務してからの業務は、同年に予定されていた皇太子（のちの大正天皇）の行啓に向けて、30余点の台覧品を一人で製作することであったというが、製作された台覧品がどのようなものであったのかについては、現時点で確認できていない。須崎自伝の記述を信頼するならば、覆刻解説が示すところの北海道庁在職時の勤務内容である「林務関係の作画」は、東京あるいは長野在勤時の業務内容を示しているものかもしれない。台覧品製作の余暇に同僚から譲り受けた樹木の枝を写生して楽しんでいたところ、その図を下宿の主人が大学の「某教授」に見せたことがきっかけでその教授との知己を得ることになり、この関係が「廻り廻って部長の耳に入り、行啓後遂に、其図に関し特命を受る事になった」という。「某教授」とは間違いなく宮部金吾であり、宮部と須崎の関係を背景として須崎に下った「特命」こそが『圖譜』の作画である。覆刻解説においては、なぜ須崎が『圖譜』の画工となったのかについては全く触れられていないが、偶然ともいふべき宮部との邂逅がその背景にあったことが知られる。

『圖譜』の特命を受けたのち、北海道庁内では須崎に対する反発が生じたらしい。その結果、反対した人物は行政整理の過程で論旨免となったが、須崎に対しても退官の要請があったという。これに対し、須崎が特命の業務担当者を誰に引き継ぐべきかなどについて反問した結果、囑託となって特命専務としてあたるように指示されたことが記載されている。このようなトラブルについては、覆刻解説はあえて記述しなかった可能性もあるが、須崎が『圖譜』作画に専念していた背景としては理解しておく必要があるだろう。正規職員としての立場を失ったこともあり、須崎自身も「不満々で日々を送」っていたと記述しているが、そのような状況であっても「例の特命の仕事に就てハ、大学の専門教授に指導を受る事となり、人格者の下に自然と、徳風に化せられ、幾分胸中に寛ぎが出て、教室にいる間が楽しく、家へ戻るのハ厭でならぬ位、趣味楽しみハ全く其仕事の上に」あったといい、宮部、工藤との関係や植物の作画に救われながら過ごしていたようである。

ここまでは『圖譜』製作に至るまでの過程であり、須崎の個人的な経歴や北海道庁内部での問題を除き覆刻解説の記述との間に大きな相違はみられない。しかしながら、製作された『圖譜』がどのように扱われていたのか、また須崎がいつまで『圖譜』製作に関与していたのかについては、須崎自伝と覆刻解説の間に大きな違いがみられる。上述した須崎の特命に対する感懐に続く部分を本文のまま引用する。

折から幸にも開道博へ出陳する事に成ったのが大正七年、夫が又思ひ設けぬ幸福の端緒と成て出版と決定したのは、偏へに其教授の権威と、世恩とであつたのハ、私の一大幸福でありました。(爰にも多大な天恵たる感謝談がありますが、公務に渉る事ですから申されぬのを遺憾に思ひます)。

其後全く特命の仕事も完成を告げ、且復官してから、十年も過ぎましたから、罷たく思つて居ましたら、東京の大震災、之に伴つて出版中の一部を消失しましたから、直ちに其補充に取掛つて居つた

ここにみるように、『圖譜』はもともと刊行を目的として製作されたものではなく、製作されていた樹木画が1918(大正7)年に開催された「開道博」に出品されたことが契機となって出版が決定されたものであり、従来述べられてきたように、1913年の「特命」段階では出版が前提とされていなかったことが示唆されるのである。また、須崎が「特命」の仕事を終えたのは、『圖譜』完成の1931(昭和6)年ではなく、「東京の大震災」つまり、1923年に発生した関東大震災以前である。加えて、「特命の仕事」が「完成を告げ」てから「十年も過ぎた」頃に関東大震災が発生していたという記述を信じるならば、須崎の『圖譜』への直接的関与は北海道庁によって「北海道主要樹木圖譜」が企画された1912年からそれほど時を経ずして終了していたことになる。これらの問題について、関連資料を確認しつつ検討してみたい。

3. 「北海道主要樹木圖譜」関連資料

本章では、宮部家から植物園に寄贈された宮部金吾資料に含まれる『圖譜』、あるいは出版以前の「北海道主要樹木圖譜」関連資料および前章で触れた「開道博」関連資料を確認しつつ、須崎自伝と覆刻解説の記述の妥当性について考察する。

まず、「北海道主要樹木圖譜」の計画がどのような形で進められていたのかについて確認する。『圖譜』緒言、覆刻解説にあるように、『圖譜』は1913(大正2)年に北海道庁によって企画されたという。須崎自伝には、1911年の皇太子行啓後に特命が下りたという記述はあるものの、年次そのものの記述はない。この年次を裏付けるものとしては、北海道庁からの嘱託状⁽³⁾がある。図1に示すように、大正2年9月15日付で北海道庁より宮部に対し「北海道主要樹木ノ選定解剖圖諸調製ニ関スル調査」が嘱託されており、1913年に北海道庁によって「北海道主要樹木圖譜」の計画が開始されたことに疑いはない。なお、宮部金吾資料には、同年12月19日付で調査嘱託の酬勞金贈与状も確認される。この贈与状は1923年まで11年間⁽⁴⁾が残されており、「北海道主要樹木圖譜」に関わる宮部の活動が少なくとも1923年まで継続していたことが確認される。これはあくまでも宮部の活動の記録であるが、「北海道主要樹木圖譜」の計画が開始された1913年からほどなく終了したという須崎の自伝の記述に対しては、作画と樹種選定・原稿執筆という役割分担などが影響していたとしても、慎重に検討する必要がある。

次に、「北海道主要樹木圖譜」が出品されたという「開道博」について確認する。従来注目されることはなかったが、『圖譜』緒言に「而シテ大正七年八月北海道開道五十年記念博覧会ノ開催セラルルニ當リ此内七十八種ヲ出陳シ公衆ノ觀覽ニ供セリ」とあるように、「開道博」とは1918年8月から9月にかけて、札幌中島公園を中心として開催された「開道五十年記念北海道博覧会」を指す。博覧会の事務報告である『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』[北海道庁1920]の記述によれば、開催館の一つである林業館の内部に「其ノ後方ノ十角塔ハ北海道森林樹木圖譜ニシテ何人ニモ直ニ理解シ得ル様肉筆ノ繪ニ利用上ニ關スル詳細ナル説明ヲ附シタルハ極メテ有益ナル参考資料」と評される図譜が展示されていたことがわかる(図2)。

この「北海道森林樹木圖譜」は、博覧会の様子を伝える新聞記事では「北海道重要樹木圖」(『北海タイムス』1918年8月9日付)という名称も与えられており、宮部や須崎が製作した「北海道主要樹木圖譜」とは名称が異なる。しかし、「林業館内出品物の概況」を紹介する雑誌記事[無署名1918]には以下の記述があり、十角塔に展示されていた図譜が「北海道主要樹木圖譜」であることが確認される。

▲北海道樹木圖譜 本道産重要樹木八十種を撰擇し各樹種の花果枝葉及子葉を幅一尺中七寸位の紙に精細に書き美しく着色したるものである。此等の圖譜を十角形をなせる高大なる塔面に配列し各圖譜の下には説明を附しておる。實に其畫の精巧美麗なるは何人も驚嘆する所にして本館出品物の白眉である。此圖譜は道廳技手順崎忠助氏が大學教授宮部博士及工藤理學士の指導を受け大正二年以後六ヶ年の歳月を費やして苦心して畫きたるものにして此種圖譜としては頗る完備せるものにして學術上誇るに足るべきものである。實に樹種の識別には必要欠くべからざるものである。

以上の三資料にみられる「北海道森林樹木圖譜」、「北海道重要樹木圖」、80種が選択された「北海道樹木圖譜」は同一のものであり、『圖譜』緒言の「七十八種ヲ出陳」したという点数との間で若干の齟齬はあるものの、須崎自伝に記された特命の図譜

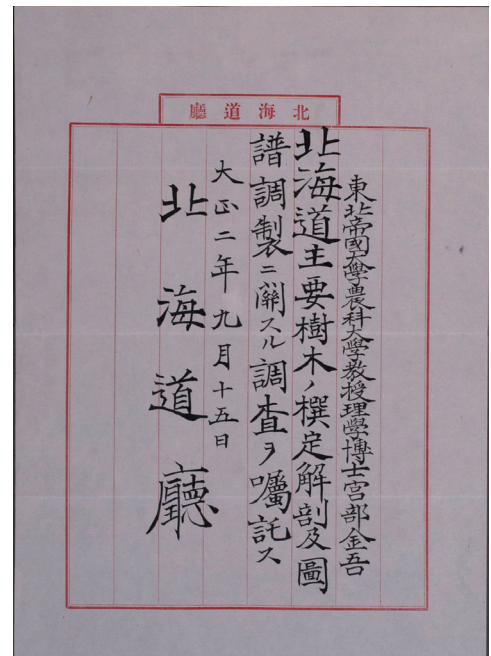


図1. 宮部金吾宛「北海道主要樹木ノ選定解剖圖諸調製ニ關スル調査」嘱託状

を指していることは間違いない。この点においては須崎自伝の記述は妥当なものと評価できるのである。それでは、展示されていた図譜はどのようなものであったのだろうか。『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』には林業館内部に展示されていた十角塔を示す写真は含まれていないが、博覧會の審査総長を務めた当時の北海道帝国大學総長佐藤昌介が所持していた「開道五十年記念北海道博覧會寫真帖」⁶⁾の中に、十角塔の正面から撮影した写真が残されていた(図3)。写真から明らかなように、展示されていた図譜は表装されており、「出品物の概況」記事にあるように樹木の説明文が記された紙片が下部に確認される点で、のちに刊行された『圖譜』とは様式面で異なる。同時に、展示されている図そのものは『圖譜』掲載図と酷似しており、同じものと評価することもできる。

ここまでの再検討結果からは、刊行された『圖譜』とは異なる、博覧會に出品された「北海道主要樹木圖譜」が存在していたことが確認された。ここで、今後の考察にあたり、以上の情報をふまえた資料名称の整理を行いたい。

北海道庁が1913年に企画した「北海道主要樹木圖譜」は、須崎の記述を信頼する限り、当初から刊行を目的としていたものではなく、1918年の開道五十年記念北海道博覧會での評価を得て刊行が決定されたとみるべきである。『圖譜』著者緒言にもあるように、博覧會までには「北海道主要樹木圖譜」は完成しており、そこから78点が選択されて展示された。この図譜は図3にみるような表装されたものであり、図の下部に植物の解説をもつものである。以降の考察では、1918年までに完成し、博覧會に展示された78点の植物画と展示されなかったものをあわせて「圖譜」と示すこととし、刊行された『圖譜』と区別する。

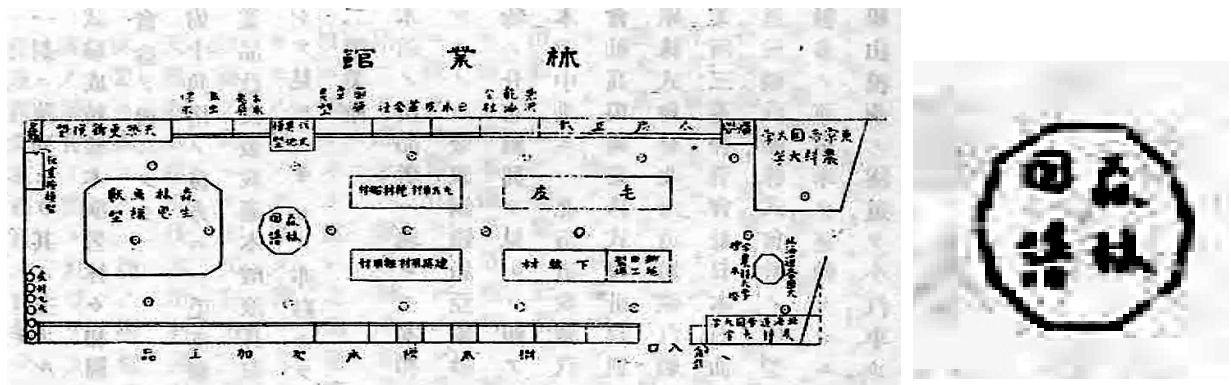


図2.『開道五十年記念北海道博覧會事務報告』における林業館の展示配置
中央左が「森林図譜」の十角塔。右は十角塔に記載された「森林図譜」の拡大
[国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/957033>) より引用]



(譜圖木樹道海北) 列陳 内館業林

図3. 林業館内部十角塔に展示された「圖譜」

次章では、『圖譜』の「原画」といわれてきた植物園所蔵資料について紹介しつつ、これが『圖譜』および「圖譜」とどのような関係にあるのか、また『圖譜』と「圖譜」の関係について考察を続けたい。

4. 「原画」の位置付け

植物園所蔵「原画」は、北海道大学農学部植物学教室の図書室に保管されていたものである。この図は、図書資料としては登録されておらず、図書室の閉室に際して今後の保存管理、活用を目的として植物園に移管されたものである。後述するように、「原画」には複数の様式の図が混在しているものの、大部分は図4に示したような表装された植物画と上部に植物名（和名及び学名）、下部に異名を含む和名、アイヌ名、用途や分布などの記述が貼り付けられている。これは図3に示した博覧会に出品された「圖譜」と同じ様式である。同時に、描かれている図は『圖譜』に掲載されているものとほぼ同じものである。「原画」が「圖譜」と同じものであるのか、あるいは『圖譜』の原画であるのか資料群全体を見通しながら考察する。

「原画」は、71枚の図・資料から構成されている。包紙には「三秀舎ヨリ返送セル分 六十図迄（昭和三年七月十三日）、内三十一ひめやしやぶしナシ 震火災ニ罹リシモ印刷済ナリシ為補充セラレス」という記載があり、この記述を信頼する限り『圖譜』の出版社である三秀舎から1928年までに返送された図群であり、「原画」と『圖譜』には深い関係があることが確認される。ただし、残されている「原画」には『圖譜』の図版番号61図以降のものも含まれており、包紙の記載以後に追加、改変が行われていることは間違いなく、場合によってはこの包紙自体が転用された可能性も残されているため、慎重に取り扱う必要がある。

『圖譜』初版には85種86点の図（カツラ図が2点）が掲載されており、再版時に誤りが確認されたヤマナラシの修正図を含めれば85種87点となる。『圖譜』掲載樹種と「原画」とを対比する表を作成し、「原画」の残存状況を示した。表を利用しつつ、「原画」がもつ歴史的価値を整理することとした。

表に示したように、『圖譜』に含まれていながら「原画」に確認できない図は、「31ひめやしやぶし」、「72べにいたや」、「73くろびいたや」、「74とちのき」、「75くろうめもどき」、「77おおぼばだいじゆ」、「78はりぎり」、「79こしあぶら」、「80たらきのき」、「81みづき」、「82はくろんぼく」、「83えごのき」、「84あをだも」、「85やちだも」、「86はしどい」、「12bやまならし」修正図（種名の前の数字は『圖譜』の図版番号を示し、種名は『圖譜』の記載を用いる）の16点である。「31ひめやしやぶし」の不在は、「原画」包紙の記述にみるように、関東大震災に伴う火災により失われたものとみられる。「72べにいたや」以降の植物図の不在は、包紙記述にある1928年の60図までの返却以降、「61やまうるし」から「71いたや」、および「76しなのき」の12枚の図は返却されたものの、これら以外の図が返却されなかったか、あるいは別に保管されていたため「原画」に含まれなかったものと推測される。

次に、現存する「原画」のうち、様式が異なる図について確認する。「32ぶなのき」、「33くり」（図5）、「34かしは」の3点は他の図と異なり、校正刷とみられる印刷物である。一方、「2あかとどまつ」、「4あをとどまつ/からふとしらびそ」、「22さはしば」（「原画」名称は「さはして」）、「38はるにれ」、「41やまぐは」、「42/43かつら」、「44ほほのき」、「46のりのき」、「48ななかまど」、「54ちしまざくら」、「65まゆみ」の12点は、肉筆図ではあるが表装されていない図である。これらの「圖譜」と異なる様式を持つ「原画」には、「2あかとどまつ」（図6）のように、表装された「原画」（図4）と同様に右上に赤枠が印字され、通し番号が振られたラベルが付属するもの（表の分類で未表装aとしたもの）、「41やまぐは」（図7）のようにラベルが付属しないもの（表の分類で未表装bとしたもの）の別があり、さらに未表装bのグループには、異なる由来があると考えられる。この点について整理してみたい。

まず、校正刷のグループ3点は、関東大震災の影響を受けたものである。上述したように「31ひめやしやぶし」の「原画」は震災で焼失したが、印刷が終了していたことで補充されなかったことが包紙の記載から確認される。覆刻解説では、『圖譜』著者跋文の「クハノキ ホノキ カツラ等ノ原圖」が消失したという記述に基づいて、この3種4点の原画のみが失われたとするが、「ひめやしやぶし」の「原画」が失われているという事実、および著者跋文の「等」の記述を広く解釈するならば、3種以外の図も失われていた可能性を検討すべきだろう。校正刷の「32ぶなのき」、「33くり」、「34かしは」の3点は、1巻10輯に含まれる「31ひめやしやぶし」に続いて2巻11輯に掲載された図である。「31ひめやしやぶし」が印刷を終えていたとするならば、11輯の刊行準備作業中に震災が発生したと推測することは許されるだろう。11輯掲載の3種の「原画」が確認されず、校正刷のみが残されているということは、「原画」が消失し、以降の作業は初校刷まで進められていたこの図を利用して刊行が進められたと理解すべきである。

次に、未表装bと分類したもののうち、「41やまぐは」、「42/43かつら」、「44ほほのき」の3点については、著者跋文に消失したことが明記されている。「原画」の当該種の図には、脇に工藤と須崎による図であることと学名と和名が記載されている点が共通している。これらについては、校正刷に至る前に「原画」が焼失し、須崎自伝に記された補充のために再度描かれたものであると評価できる。

一方、博覧会に出品された表装図と同じラベルが付属する「2あかとどまつ」などは震災とは別の理由から表装されなかったものと考えられる。「2あかとどまつ」の脇には「屈斜路産 宮部博士採集 大正四年八月中旬、全 全 廿七日描画、全年全月 釧路松岡署長ヨリ寄贈品ハ猶多ク芭鱗ノ半ヲ鱗片外ニ現ハシ其他ノ形状ハ同シキヲ以テ描画ヲ見合■■ 発芽釧路産大学苗圃播種 五年七月廿六日 画 工藤氏関」とあり、「4あをとどまつ/からふとしらびそ」には「からふとしらびそ 樺太産 米人

Prunus sachalinensis Koidz.

らくぎまやぞえ

五十五



名称 えぞやまざくら
 ら おほやまざくら
 ら カリムバ (アイヌ
 名)
 科名 薔薇科
 用途 材ハ指物洋家
 具建築器具器械樂
 器版木彫刻漆器木
 地運動用器紡績用
 木管柄薪炭紫檀及
 黒檀ノ模倣材等ノ
 用ニ供ス花ハ塩漬
 シテ食用トス又観
 賞用ニ適ス
 分布 本道各所ニ生
 シ樺太及本州ニ分
 布ス

図4.「原画」えぞやまざくら

表.『圖譜』と「原画」対応表

		『圖譜』			「原画」		
巻	輯	図版番号	図版記載学名	図形態	原画記載学名	追加・修正記載	備考
		1	<i>Taxus cuspidata</i> Sieb. et Zucc. いちみ	表装	<i>Taxus cuspidata</i> S. et Z. いちみ・おんこ		
	1	2	<i>Abies sachalinensis</i> Fr. Schm. あかとどまつ	未表装 a	記載なし ■松		描画データ有
		3	<i>Abies Mayriana</i> Miyabe et Kudo. あをとどまつ	表装	<i>Abies sachalinensis</i> Fr. Schm. とどまつ		
		4	<i>Abies Mayriana</i> Miyabe et Kudo. <i>Abies Wilsonii</i> Miyabe et Kudo. あをとどまつ／からふとしらびそ	未表装 a	記載なし からふとしらびそ		描画データ有
	2	5	<i>Picea Glehni</i> Mast., form. <i>chlorocarpa</i> Miyabe et Kudo.(Pl.) <i>Picea Glehni</i> Masters. form. <i>chlorocarpa</i> Miyabe et Kudo.(Text) あをみのあかえぞ・あかえぞまつ	表装	<i>Picea Glehni</i> Mast. あかえぞまつ		
		6	<i>Picea jezoensis</i> Carr. えぞまつ	表装	<i>Picea jezoensis</i> Carr. たうひ・えぞまつ		
		7	<i>Larix dahurica</i> Turcz., var. <i>japonica</i> Maxim. ぐいまつ	表装	<i>Larix dahurica</i> Turcz. ぐいまつ	var. <i>japonica</i> Maxim.	
		8	<i>Pinus pentaphylla</i> Mayr. ごえうまつ (pl.) / ごえふまつ (Text)	表装	<i>Pinus pentaphylla</i> Mayr. ごえうまつ		
	3	9	<i>Pinus pumila</i> Regel.(Pl.) <i>Pinus pumila</i> Rgl.(Text) はひまつ	表装	<i>Pinus pumila</i> Rgl. はひまつ		
		10	<i>Thujaops dolabrata</i> Sieb. et Zucc., var. <i>Hondai</i> Makino. ひのきあすなる	表装	<i>Thujaops dolabrata</i> S. et Z. あすなる	var. <i>Hondai</i> Mak. 「ひのき」追記	
		11	<i>Populus Maximowiczii</i> A. Henry. どろのき	表装	<i>Populus Maximowiczii</i> A. Henry. どろのき		
	4	12	<i>Populus Sieboldii</i> Miq.(Pl.) <i>Populus Sieboldi</i> Miq.(Text) やまならし	表装	<i>Populus Sieboldii</i> Miq. やまならし		
		13	<i>Salix Urbaniana</i> v. Seem. var. <i>Schneideri</i> Miyabe et Kudô. とかちやなぎ	表装	<i>Salix Urbaniana</i> v. Seem. おほぼやなぎ		
		14	<i>Salix jessoensis</i> v. Seem. しろやなぎ	表装	<i>Salix jessoensis</i> v. Seem. しろやなぎ		
	5	15	<i>Salix Caprea</i> L. ぼつこやなぎ	表装	<i>Salix Caprea</i> L. ぼつこやなぎ		
		16	<i>Salix rorida</i> Lacks. えぞやなぎ	表装	<i>Salix rorida</i> Lacks. えぞやなぎ		
		17	<i>Salix viminalis</i> L., var. <i>yezoensis</i> C. K. Schn. きぬやなぎ	表装	<i>Salix viminalis</i> L. var. <i>yezoensis</i> Schn. きぬやなぎ	「C. K.」追記	
	6	18	<i>Salix sachalinensis</i> Fr. Schm. ながぼやなぎ	表装	<i>Salix opaca</i> L. ながぼやなぎ		
		19	<i>Salix Miyabeana</i> v. Seem. えぞかはやなぎ	表装	<i>Salix Miyabeana</i> v. Seem. えぞのかはやなぎ	えぞかはやなぎ	
		20	<i>Juglans Sieboldiana</i> Maxim. おにぐるみ	表装	<i>Juglans Sieboldiana</i> Maxim. おにぐるみ		
	7	21	<i>Pterocarya rhoifolia</i> Sieb. et Zucc. さはぐるみ	表装	<i>Pterocarya rhoifolia</i> S. et Z. さはぐるみ		
		22	<i>Carpinus cordata</i> Bl. さはしぼ	未表装 b	<i>Carpinus cordata</i> Bl. さはしで		
		23	<i>Carpinus laxiflora</i> Bl. あかしで	表装	<i>Carpinus laxiflora</i> Bl. あかしで		
	8	24	<i>Ostrya japonica</i> Sargent.(Pl.) <i>Ostrya japonica</i> Sarg.(Text) あさだ	表装	<i>Ostrya japonica</i> Sargent. あさだ		
		25	<i>Betula Maximowicziana</i> Rgl. さいはだかんば	表装	<i>Betula Maximowicziana</i> Rgl. さいはだかんば		
		26	<i>Betula Ermanii</i> Cham. えぞのだけかんば	表装	<i>Betula Ermanii</i> Ehrh. えぞのだけかんば	<i>Betula Ermanii</i> Cham.	
	9	27	<i>Betula japonica</i> Sieb. しらかんば	表装	<i>Betula japonica</i> Sieb. しらかんば		
		28	<i>Alnus japonica</i> Sieb. et Zucc., var. <i>arguta</i> Call. えぞはんのき	表装	<i>Alnus japonica</i> S. et Z. var. <i>arguta</i> Call. はんのき	えぞはんのき	
		29	<i>Alnus hirsuta</i> Turcz. けやまはんのき	表装	<i>Alnus hirsuta</i> Turcz. けやまはんのき		
	10	30	<i>Alnus Maximowiczii</i> Call. みやまはんのき	表装	<i>Alnus Maximowiczii</i> Call. みやまはんのき		
		31	<i>Alnus pendula</i> Matsum. ひめやしやぶし			欠	
		32	<i>FAGUS Sieboldi</i> Endl.(Pl.) <i>Fagus Sieboldi</i> Endl.(Text) ぶなのき	校正刷	<i>FAGUS Sieboldi</i> Endl. ぶなのき		
	2	11	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. くり	校正刷	<i>Castanea pubinervis</i> C. K. Schn. くり	<i>Castanea crenata</i> Sieb. Et Zucc.	
		34	<i>Quercus dentata</i> Thunb. かしは	校正刷	<i>Quercus dentata</i> Thunb. かしは		

巻	冊	『図譜』		図形態	「原画」		
		図版番号	図版記載学名		原画記載学名	追加・修正記載	備考
2	12	35	<i>Quercus mongolica</i> Fisch. からふとがしは	表装	<i>Quercus mongolica</i> Fisch. からふとがしは		
		36	<i>Quercus crispula</i> Bl. みづなら	表装	<i>Quercus grosseserrata</i> Bl. みづなら		
		37	<i>Quercus glandulifera</i> Bl. こなら	表装	<i>Quercus glandulifera</i> Bl. こなら		
		38	<i>Ulmus japonica</i> Sarg. はるにれ	未表装 b	記載なし 記載なし		
	13	39	<i>Ulmus laciniata</i> Mayr. おひよう	表装	<i>Ulmus laciniata</i> Mayr. おひよう		
		40	<i>Celtis Bungeana</i> Bl. var. <i>jessoensis</i> Miyabe et Kudo. えぞえのき	表装	<i>Celtis jessoensis</i> Koidz. えぞえのき		
		41	<i>Morus bombycis</i> Koidz. やまぐは	未表装 b	<i>Morus bombycis</i> Koidz. やまぐは		
	14	42/43	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc. かつら	未表装 b	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc. かつら		
		44	<i>Magnolia obovata</i> Thunb. ほほのき	未表装 b	<i>Magnolia obovata</i> Thunb. ほほのき		
		45	<i>Magnolia Kobus</i> DC. var. <i>borealis</i> Sargent. きたこぶし	表装	<i>Magnolia Kobus</i> DC. var. <i>borealis</i> Sargent ひきざくら		
		46	<i>Hydrangea paniculata</i> Sieb. のりのき	未表装 b	記載なし 記載なし		描画データ有
	16	47	<i>Malus baccata</i> Borkh. var. <i>mandshurica</i> C. K. Schn. えぞのこりんご	表装	<i>Malus baccata</i> Defs., var. <i>mandshurica</i> Schn. えぞのこりんご・さんなし		
48		<i>Sorbus commixta</i> Hedl. ななかまど	未表装 b	<i>Sorbus commixta</i> Hedl. ななかまど			
49		<i>Micromeles alnifolia</i> Koehne. あづきなし	未表装 b	記載なし あづきなし		描画データ有	
50		<i>Photinia villosa</i> DC. かまつか	表装	<i>Photinia villosa</i> DC. かまつか			
17	51	<i>Crataegus jozana</i> Schn.(Pl.) <i>Crataegus jozana</i> C. K. Schn.(Text) えぞおほさんざし	表装	<i>Crataegus jozana</i> Schn. えぞおほさんざし			
	52	<i>Prunus Maximowiczii</i> Rupr. しろざくら	表装	<i>Prunus Maximowiczii</i> Rupr. しろざくら			
	53	<i>Prunus Sargentii</i> Rehder.(Pl.) <i>Prunus Sargentii</i> Rehd.(Text) えぞやまざくら	表装	<i>Prunus sachalinensis</i> Koidz. えぞやまざくら			
18	54	<i>Prunus kurilensis</i> Miyabe. ちしまざくら	未表装 b	<i>Prunus kurilensis</i> Miyabe ちしまざくら			
	55	<i>Prunus Padus</i> L. えぞのうはみづざくら	表装	<i>Prunus Padus</i> L. えぞのうはみづざくら			
	56	<i>Prunus Grayana</i> Maxim. うはみづざくら	表装	<i>Prunus Grayana</i> Maxim. うはみづざくら			
19	57	<i>Prunus Ssiori</i> Fr. Schm. しうりざくら	表装	<i>Prunus Ssiori</i> Fr. Schm. しうりざくら			
	58	<i>Maackia amurensis</i> Rupr. et Maxim., var. <i>Buergeri</i> C. K. Schn. いぬえんじゆ	表装	<i>Maackia amurensis</i> Rupr. et Maxim., var. <i>Buergeri</i> Schn. いぬえんじゆ			
	59	<i>Phellodendron sachalinense</i> Sarg. ひろぼのきはだ	表装	<i>Phellodendron amurense</i> Rupr. var. <i>sachalinensis</i> Fr. Schm. しころ・ひろぼのきはだ			
20	60	<i>Picrasma quassioides</i> Benn. にかき	表装	<i>Picrasma quassioides</i> Benn. にかき			
	61	<i>Rhus trichocarpa</i> Miq. やまうるし	表装	<i>Rhus trichocarpa</i> Miq. やまうるし			
	62	<i>Rhus semialata</i> Murr. ふしのき	表装	<i>Rhus javanica</i> L. ふしのき			
21	63	<i>Ilex macropoda</i> Miq. あをはだ	表装	<i>Ilex macropoda</i> Miq. あをはだ		「但し発芽 二三を加フル コト」注記	
	64	<i>Evonymus oxyphylla</i> Miq. つりばな	表装	<i>Evonymus oxyphylla</i> Miq. つりばな	<i>E. planipes</i> Koehne おほつりばな		
	65	<i>Evonymus hians</i> Koehne. まゆみ	未表装 a	<i>Evonymus hians</i> Koehne まゆみ			
3	22	<i>Acer ukurunduense</i> Trautv. et Mey. をがらばな	表装	<i>Acer ukurunduense</i> Trautv. et Mey. をがらばな			
	67	<i>Acer Ginnala</i> Maxim. からこぎかへで	表装	<i>Acer Ginnala</i> Maxim. からこぎかへで			
	68	<i>Acer japonicum</i> Thunb. めいげつかへで	表装	<i>Acer japonicum</i> Thunb. めいげつかへで			
	69	<i>Acer palmatum</i> Thunb. やまもみぢ	表装	<i>Acer palmatum</i> Thunb. やまもみぢ			
23	70	<i>Acer cissifolium</i> C. Koch.(Pl.) <i>Acer cissifolium</i> Koch(Text) みつでかへで	表装	<i>Acer cissifolium</i> C. Koch. みつでかへで			

巻	冊	『圖譜』		『原画』		
		図版番号	図版記載学名	図形態	原画記載学名	追加・修正記載
3	24	71	<i>Acer pictum</i> Thunb. いたや	表装	<i>Acer pictum</i> Thunb. いたや	
		72	<i>Acer Mayrii</i> Schwerin. べにいたや			欠
		73	<i>Acer Miyabei</i> Maxim. くろびいたや			欠
	25	74	<i>Aesculus turbinata</i> Bl. とちのき			欠
		75	<i>Rhamnus japonica</i> Maxim. くろうめもどき			欠
		76	<i>Tilia japonica</i> Simk. しなのき	表装	<i>Tilia japonica</i> Simk. しなのき	
	26	77	<i>Tilia Maximowicziana</i> Shirasawa. おほぼぼだいじゆ			欠
		78	<i>Kalopanax septemlobum</i> Koidz. はりぎり			欠
		79	<i>Kalopanax sciadophylloides</i> Harms. こしあぶら			欠
		80	<i>Aralia elata</i> Seem. たらのき			欠
		81	<i>Cornus controversa</i> Hemsl. みづき			欠
82		<i>Styrax Obassia</i> Sieb. et Zucc. はくうんぼく			欠	
27	83	<i>Styrax japonicus</i> Sieb. et Zucc. えごのき			欠	
	84	<i>Fraxinus Sieboldiana</i> Bl. あをだも			欠	
	85	<i>Fraxinus mandshurica</i> Rupr., var. <i>japonica</i> Maxim. やちだも			欠	
	86	<i>Syringa japonica</i> Deene. はしどい			欠	
再版 1	4	12b	<i>Populus Sieboldi</i> Miq. やまならし			欠



図 5. 校正刷「原画」 くり

二

松
 辰野路尾宮部博士採集
 大正四年八月下旬
 全葉青銅
 銅板
 寄贈
 尾宮部博士採集
 大正四年八月下旬
 全葉青銅
 銅板
 寄贈



図6. 未表装 a「原画」 あかとどまつ



図7. 未表装b「原画」 やまぐは

ウキルソン氏採取 大正三年八月廿三日描画」という記述がある。アカトドマツの記載については、1915（大正4）年6月2日付宮部金吾宛須崎忠助書簡⁽⁷⁾において、須崎が道東方面でエゾマツやアカトドマツ、アオトドマツの写生のために活動していることが記されていることと年代的に合致しており、「原画」製作時の記載とみて間違いないだろう。震災によって原画が焼失し、補充したものであれば震災以前の描画日を記載する必要はないことから、これらは補充品ではなく当初から製作されていた図とみるべきである。それでは、なぜこれらの図は表装されていないのだろうか。

ここで、開道五十年記念博覧会の展示写真を確認すると、その理由が推測できる。図8は写真から確認される三面の展示図を『圖譜』の図版番号で示したものである。向かって右面の『圖譜』3巻に含まれる「原画」が現存しないため、完全な照合とはならないが、未表装である「2 あかとどまつ」、「4 あをとどまつ/からふとしらびそ」が展示されていなかったことが判明する。「からふとしらびそ」は当時北海道で確認されていなかった種ということもあり展示に用いられなかったのであろう。「12 やまならし」修正図を除き、「圖譜」として製作された85種86点の図のうち、展示された図が78点であり、8点が展示されていなかったことを考慮に入ると、未表装aに分類された「2 あかとどまつ」、「4 あをとどまつ/からふとしらびそ」、「65 まゆみ」の3点は博覧会に展示されていなかった図とみるべきである。

次に、未表装bに分類したもののうち、「22 さはしば」、「38 はるにれ」、「46 のりのき」、「48 ななかまど」、「54 ちしまざくら」の位置づけについて検討する。ハルニレやノリウツギ（のりのき）が「北海道主要樹木」として選定されないということは考えづらく、これらがなぜ表装された形で残されていないのか、疑問が生じる。そこで「46 のりのき」図を確認すると、図の脇に「実 八年九月十八日 冬芽 四年十二月廿六日野幌産 閱了」という記載がある。実を描画、もしくは採集した日付とみられる「（大正）八年九月十八日」は、博覧会最終日の前日であり、すくなくとも「46 のりのき」の図はこのままの形で博覧会に出品されていたとは考えられない。一方で、図に関東大震災以前に描画したと記載されている以上、これを震災で消失したものの補充図と評価することもできない。博覧会開催までに完成していたはずの「圖譜」の中で、これらの図の位置づけについては改めて検討する必要がある。この点については後述することとしたい。

ここまで、残された「原画」から、博覧会に出品された図、出品されなかった図、震災により被害を受けた図という一応の歴史を把握することができた。また、未表装図の脇にある記述から、当該図に描かれている植物の由来情報や、いつ須崎によって描画され、工藤によるチェックを受けていたのかについても知ることができる。須崎自伝によれば、須崎は関東大震災が発生した1923年の10年ほど前には「圖譜」の業務を終えていたという。しかし、「2 あかえぞまつ」にある記載や、須崎の書簡の記述、「46 のりのき」の記載から、すくなくとも1915年や1919年には須崎が「圖譜」の作図に関与していたことが確認できる。須崎が「圖譜」に関与していた時期に関する記述については、自伝の記述をそのまま理解するのではなく、嘱託として特命に専務していた立場から北海道庁の正規職員へと復帰したのが震災の10年ほど前にあたり、「圖譜」製作には博覧会の時期、あるいは『圖譜』刊行直後までは関与していたと解釈するべきかもしれない。ただし、図が描かれた背景や須崎の関与についての検討を行うための情報として有益な植物図の作画に関する記載は、「圖譜」として博覧会に出品するために表装されたことで、大部分が失われてしまっており、詳細な成立過程や須崎の関与時期を考察することは困難である。

「原画」は、一部が失われているとはいえ、博覧会に展示された「圖譜」と展示されなかった図を含むもので、北海道庁が1913年に企画した「北海道主要樹木図譜」であるといえる。従来の見解では、企画された「北海道主要樹木圖譜」を1931（昭和6）年に完成した『圖譜』と評価していたため、宮部・工藤・須崎の三者が企画当初の1913年から『圖譜』完成の1931年に

10	9?	解 説		?	76
11	12	3	1	79	78
14	13	6	5	82	81
18	15	8	7	85	84

図8. 展示「圖譜」配置. 数字は『圖譜』図版番号を示す

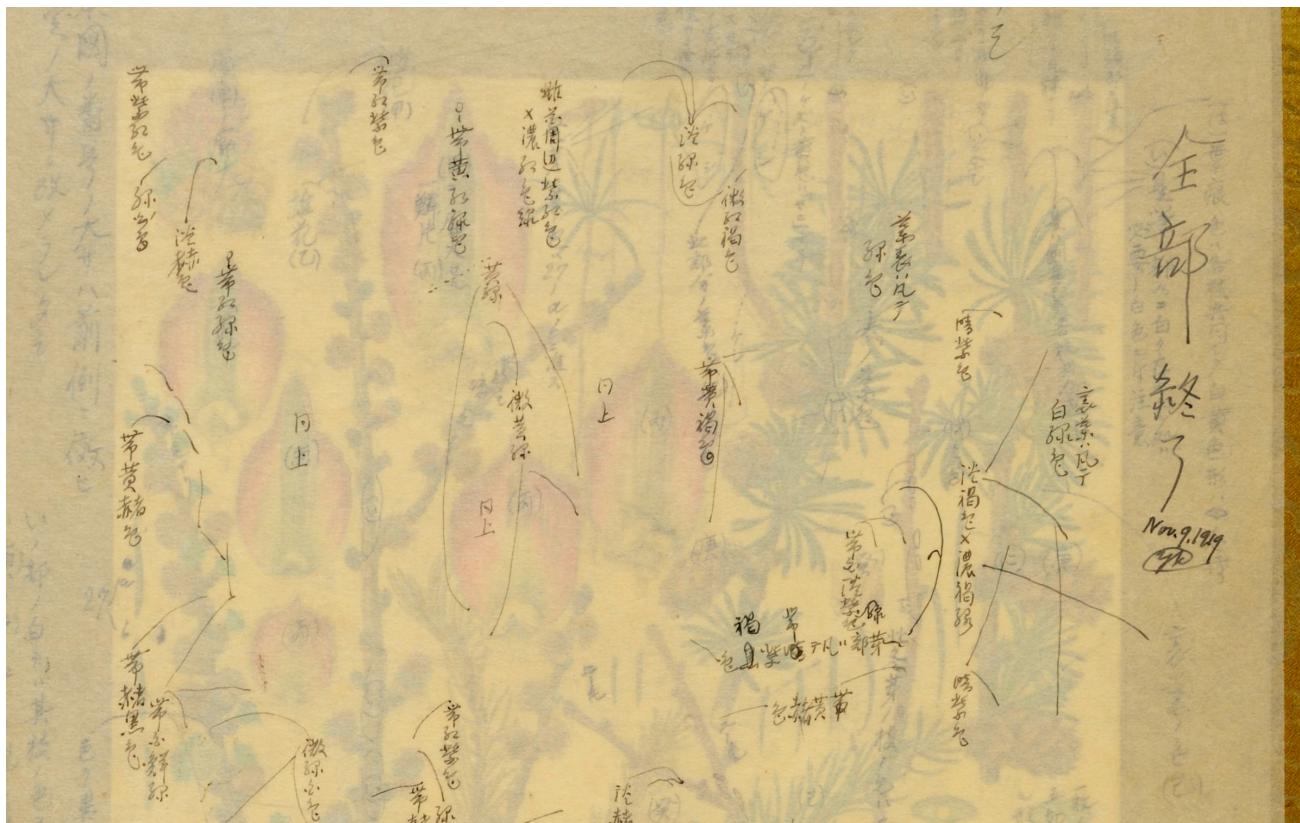


図9.「原画」ぐいまつ図に貼り付けられた印刷色の指示書

至るまで精力的に関与していたとみなされてきた。しかしながら、『圖譜』と展示された「圖譜」が別のものであること、関東大震災による被害を受けた一部の図を除き、「原画」は1918年に開催された博覧会までにはほぼ完成していたとみるべきであって、自伝の記述のように画工としての須崎の関与は『圖譜』刊行開始までにはおおむね終了していたとみるべきだろう。「原画」には工藤による色の指示（図9）が確認されるが、これは須崎に対する指示ではなく、印刷会社である三秀舎への指示である。この点からも図そのものは「圖譜」までに完成していたとみるべきであろう。

一方、「原画」の一部が関東大震災によって三秀舎で焼失したことや、三秀舎への色の指示が存在していることから、「原画」は『圖譜』の原画という位置付けも有している。後述するように、「原画」と展示「圖譜」を比較すると、若干の相違点が確認される。これは、「原画」が展示「圖譜」から刊行『圖譜』を繋ぐ存在であり、刊行『圖譜』の完成までに行われた様々な編集作業や改変が反映されているのである。次章において、「原画」を通した「圖譜」と『圖譜』の関係について検討を続ける。

5. 「圖譜」から『圖譜』へ

前章までにみたように、「原画」は1913（大正2）年から事業が始まった「北海道主要樹木図譜」として製作されたもののうち、博覧会に出品されるために表装されたもの、出品されなかった未表装のもの、『圖譜』編集時に関東大震災で失われた図を補充した図、補充せず校正刷の形で残された図のほか、「36はるにれ」や「46のりのき」のようにその位置づけが必ずしも明確でない図から成り立っている。「原画」が最終的に『圖譜』のために利用されたことは間違いないが、当初から刊行することを前提にして製作されたものではなかったため、「原画」と『圖譜』には異なる部分も存在する。『圖譜』には、「原画」に残る「圖譜」の解説とは異なる内容の詳細な植物学的解説があり、種によっては用いられている学名が変更されている場合がある。また、「圖譜」として展示された図から『圖譜』に至るまでに修正が加えられている事例も確認できる。本章ではそれらの点を整理し、『圖譜』刊行に至るまでの歴史的経緯を検討したい。

はじめに図の修正について確認する。図10は「原画」の「1いちみ・おんこ」であり、図11は博覧会で展示されていた「いちみ・おんこ」、図12は『圖譜』の「1いちみ」である。この三図を比較すると、「原画」は展示されていた図の上部に葉の断面図が追加（貼り付け）されているものの、基本的な植物体の配置は共通である。一方、『圖譜』では、葉の断面図を含めて配置が異なっていることがわかる。つまり、「原画」は『圖譜』の原版そのものではなく、刊行のために三秀舎で補正が行われていたことが理解できる。

これに対し、「原画」の「5あかえぞまつ」（図13）は、展示「圖譜」の植物体配置（図14）ではなく、刊行『圖譜』の配置（図15）と合致している。つまり、「5あかえぞまつ」は展示「圖譜」としての形を保持しておらず、刊行『圖譜』の原図として改変



図 10.「原画」いちみ・おんこ図



図 11. 展示 いちみ・おんこ図



図 12. 初版『圖譜』いちみ図



図 13.「原画」あかえぞまつ図



図 14. 展示あかえぞまつ図



図 15. 初版『圖譜』あかえぞまつ図

されているのである。図の修正の理由については、『圖譜』刊行開始年である 1919 年 12 月 23 日付宮部金吾宛工藤祐舜書簡に「一、本年九月下旬、(三号) 苫小牧御料林に出張致し、あかえぞの赤き色の球果を採集致し従来の図版(黄緑色の球果のみ書きあり候)に加へ申候」とあるように、「圖譜」完成後から『圖譜』刊行までの間に得られた新たな知見を加えるために施されたものとみられる。「5 あかえぞまつ」の「原画」は、体裁としては展示用に表装されたものであるが、実際の図を確認すると種子などの図が大幅に貼り直されており、『圖譜』の原版として評価できるものである。このことから、「1 いちみ・おんこ」図の編集ののち、三秀舎から完成原稿での納品が求められたか、著者が意図する配置にするために、図を修正したのだろう。博覧会の展示写真との比較から「原画」が改変されている図は他に「3 あおとどまつ」、「7 ぐいまつ」と、おそらく「10 ひのきあすなろ」、「85 やちだも」が確認できることから、博覧会に展示された「原画」の一部は展示された「図譜」そのままの状態を残していないことになる。

この点を考慮に入ると、前章でみた未表装の「38 はるにれ」図などが、補充された図にある学名と和名の記載がないという特徴を共有していない理由も推測される。「38 はるにれ」が北海道の主要樹木として博覧会に出品されなかったとは考えにくく、本来は表装された形で保存されていたはずである。しかし、『圖譜』刊行に適した図とするにあたって、植物体の配置移動だけでは収まらなかったために、再度描き直すことになり、結果として現在の形で保存されたものと考えておきたい。なお、「29 けやまはんのき」図は、「1 いちみ」図と同様に「原画」と『圖譜』の植物体の構図が異なっているが、「原画」の右側に貼り付け痕が残っていることから、修正図を貼り付けた形で三秀舎に送付されたが、修正図が脱落したものと推測される。

「5 あかえぞまつ」の図が改変された理由として、博覧会出品後に得られた新たな知見を盛り込んでいたことについては上述したが、このような植物学的知見が『圖譜』刊行にあわせて加えられている事例は、この他にも確認される。そのいくつかを最後に紹介しておく。

「原画」の「6 たうひ・えぞまつ」は、『圖譜』では「6 えぞまつ」と名称が変更されている。これは、上述した工藤書簡に「本年八月より九月上旬に至る約二十日間の日程にて道庁より命にて信州に出張、八ヶ嶽八千尺の個所にてトウヒの尺余のものを伐切しトウヒとエゾマツとは全く異なるものなることを認め」とあるように、「圖譜」製作時点で同一と考えていたトウヒとエゾマツとを別種と認め、「たうひ」の記載を削除したものである。

「原画」の「3 とどまつ」も、『圖譜』では「3 あをとどまつ」とされ、新たな分類学的知見が取り入れられている。「あをとどまつ」は、博覧会の翌年にトドマツの変種 *Abies sachalinensis* var. *mayriana* として発表されたが [Miyabe & Kudo 1919]、『圖譜』において改めて独立種 *A. mayriana* とする考えが示されている。同じモミ属の「原画」「4 からふとしらびそ」は、『樺太植物誌」[宮部・三宅 1915] 執筆時にはネムロトドマツ *Abies nemorensis* に当るものと考えられた標本が再検討され、博覧会後にカラフトトドマツ *A. wilsonii* [Miyabe & Kudo 1919] として新種発表されたものである。『圖譜』はこれらの新知見を反映している。なお、この学名は現在では *A. sachalinensis* var. *nemorensis* のシノニムとされる。

「原画」の「7 ぐいまつ」について、『樺太植物誌』では基本種ダフリアカラマツ *Larix dahurica* との形態的区別は困難としていたが、その後の再検討で Wilson [1916] の考えに従い、『圖譜』ではグイマツをダフリアカラマツの変種 var. *japonica* とする見解を採用した。「原画」の「10 あすなろ」については、変種ヒノキアスナロ *Thujaopsis dolabrata* var. *hondai* (命名規約に従った正しい変種名は var. *hondae*) が博覧会より以前に Makino [1901] によって発表されていた。『圖譜』では Wilson [1916] の考えを支持しつつ「ひのきあすなろ」を採用している。E. H. Wilson (1876-1930 年) はイギリス王立キュー植物園やハーバード大学アーノルド樹木園のためにアジアを調査したプラントハンターである。Wilson [1916] が日本の裸子植物についてまとめた『The conifers and taxads of Japan』は、『樺太植物誌』刊行と博覧会開催の間の時期に出版されたが、『圖譜』は Wilson [1916] の考えを大いに参考にしてしている。上述のカラフトトドマツ *A. wilsonii* の学名について、『圖譜』には「極東ノ樹木ニ精通セル大探検家ウキルソン氏ノ名ニ因ミ得タルヲ悦ブ」と書かれており、宮部・工藤が Wilson に対し敬意をもち、その影響を受けていたことがうかがえる。

被子植物についても、博覧会以降、分類学的な再検討が行われている。『圖譜』で発表された新分類群には、アカエゾマツの品種「5 あをみのあかえぞ」、オオバヤナギの変種「13 とかちやなぎ」、トウエノキの変種「40 えぞえのき」などがある。その他、国内外における標本調査などで知り得たことを反映して『圖譜』において「原画」と異なる学名が使用された例として、「18 ながばやなぎ」、「33 くり」、「36 みづなら」、「53 えぞやまざくら」、「59 ひろばのきはだ」、「62 ふしのき」などがある。

以上のように、『圖譜』刊行にあたっては工藤祐舜によって展示「圖譜」で不十分だった植物学的知見が加えられ、また「原画」はもっとも適切と判断された植物図と配置に修正されている。詳細な植物学的解説とあわせ、『圖譜』は「圖譜」と異なるものと評価できる。特に、工藤にとってその意識は強かったようで、上述した 1919 年 12 月 23 日付宮部宛工藤書簡には「圖譜の内容及圖譜の沿革に関しては、始め須崎氏の提出せる材料により三秀舎に書きたるものは甚だしく須崎氏自身一人にて全部この圖譜を完成せるがごとき文章なりしたため、新島氏(英訳協力者新島善直:引用者注)と相談の上、小生全部書き変へ申候、尚北海道林業會報に須崎の話により書きたりと云ふ図譜の話の如き、小生の意に満たざる所多々有之候」という記述がみられる。後段の「北海道林業會報」とは、おそらく「北海道主要樹木圖譜出版さる」[無署名 1919] という記事を指しているものと考えられる。ここには須崎による図の精巧さを称える表現ののち、説明書きが宮部、工藤によって記述されたという紹介となっている。出版社や外部からは、刊行『圖譜』が、展示「圖譜」の延長として評価される傾向があったのに対し、工藤にとっては、英文を含む

詳細な解説と、最新の知見に基づいた植物画からなる『圖譜』は「圖譜」とは別のものという認識があったものと評価できる。ただし、この書簡の記述のみをもって工藤と須崎の関係が悪化していたという評価は妥当ではない。須崎自伝には宮部と工藤に対する尊敬の念しか確認することはできないことから、「圖譜」から『圖譜』への移行時に生じた小さな誤解とみるべきだろう。ここで確認しておくべきことは、著者の一人である工藤にとって、「圖譜」と『圖譜』は別のものとして扱われるべきであるという認識があったという点のみである。

むすび

『北海道主要樹木圖譜』は、従来認識されてきたような1931年に完結した『圖譜』だけでなく、開道五十年記念北海道博覧会に出品された「圖譜」としての歴史を持っていたことをここまで示してきた。一方で、『圖譜』は展示「圖譜」を基盤としているものの、「いちみ・おんこ」図を除き多くの図が修正されていること、また植物解説についても展示用の簡便なものから、最新の知見が加えられた詳細な解説が施されていることからみて、両者を同一のものとしてみるのではなく、切り分けて考える必要があることも明らかとなった。これらの結果とあわせて、「圖譜」の展示の様式を残しつつ、『圖譜』の原画として利用された「原画」が大部分現存していることが確認されたことも本稿のひとつの成果である。

『北海道主要樹木圖譜』の成立過程の一端が明らかになったことで、新たな資料調査や研究の進展が期待される。たとえば、秋月〔2010〕のカバー袖に利用されている『圖譜』の「くろびいたや」と「ちしまざくら」の校正刷は北海道大学大学院農学研究科（当時の組織名称、現在の農学研究院）に所蔵されていたものとされるが、これらは「原画」に含まれておらず、別の形で保存されていたものが存在していることは明らかである。『圖譜』編纂時に利用されたこれらの資料は、場合によっては「原画」に含まれていない『圖譜』3巻の「原画」と一緒に保管されていたのかもしれない。また、図版とは別に、工藤が執筆した解説原稿も何らかの形で保存されている可能性もあるだろう。本稿が、『圖譜』関連資料の再発見の端緒となれば幸いである。

（謝辞）

本稿を取りまとめるにあたり、北海道大学附属図書館職員各位から資料調査にあたって助言、協力を得た。また図に記載された調査に関する標本探索にあたっては、元北海道大学総合博物館の高橋英樹博士の協力を得た。北海道大学大学文書館職員各位および北海道立文書館の山田正氏には、アーカイブに関する助言を得た。最後に、「原図」を利用する機会と保存管理責任を与えていただいた元植物園長の増田清博士には、本稿執筆にあたって温かい支援をいただいた。また、査読者の北海道大学文学研究院の梅木佳代氏からは有益なコメントをいただいた。記して皆様に謝意を表したい。

注

- (1) 国立国会図書館デジタルコレクションのデータベース (<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1100980> : 2023年3月7日閲覧) においては、この資料名を「私乃往路」とするが、資料の記載と内容から本稿では「私くしの経路」とする。
- (2) 須崎は「忠輔」のほか「一光」という名前も利用していた [加藤ら 2016]。
- (3) 植物園所蔵宮部資料 0288。
- (4) 植物園所蔵宮部資料 0290,0291,0298,0304,0310,0318,0326,0333,0338,0343,0349,0354。嘱託費の書類は毎年12月後半の日付であるが、1921年分は6月(0338)と12月(0343)の2点ある。
- (5) 実物未見であるが、この記事に示されている「北海道重要樹木圖」と同じ名称を持つ資料が存在しているという (<http://kitanokimuseum.jp/jumokuzu/> 2023年3月6日閲覧)。これは、須崎忠助が描いた図を1922年7月5日に印刷したものというが、本稿で示すように開道五十年記念北海道博覧会に展示されていた「北海道重要樹木圖」は1912年から北海道庁で進められていた「北海道主要樹木圖譜」であり、内容的にも別のものである。印刷日から考えて、この図は1922年7月12日に北海道帝国大学に行啓 [北海道帝国大学 1926] した皇太子（のちの昭和天皇）に献上するために、「北海道主要樹木圖譜」に用いた図を利用して製作したものと考えべきだろう。
- (6) 北海道大学附属図書館所蔵。
- (7) 本稿で引用する宮部宛の書簡は、宮部金吾の遺品として植物園に寄贈されたものである。現在は北海道大学大学文書館所蔵。

引用・関連文献

- 秋月 俊幸編 2010 書簡集からみた宮部金吾：ある植物学者の生涯，北海道大学出版会，札幌。
- 覆刻『北海道主要樹木図譜』編集委員会 1984 覆刻版 解説，宮部金吾・工藤祐舜・須崎忠助． 覆刻 北海道主要樹木図譜，北海道大学図書刊行会，札幌。
- 北海道庁編 1920 開道五十年記念北海道博覧會事務報告，北海道庁，札幌。
- 北海道帝国大学 1926 創基五十年記念北海道帝国大学沿革史，北海道帝国大学，札幌。
- 加藤 克・高橋 英樹・中村 剛 2016 須崎忠助の略歴と「大雪山植物其他」が描かれた時代背景，須崎忠助・加藤克・高橋英樹・中村剛・早川尚． 須崎忠助植物画集「大雪山植物其他」，北海道大学出版会，札幌。
- Makino, T. 1901 Observations on the flora of Japan, Bot. Mag. Tokyo 15: 102–114.
- 宮部 金吾 1932 故工藤祐舜氏の傳，札幌博物学会会報，12 (2・3) :181-188.
- Miyabe, K., Kudo, Y. 1919 Materials for a flora of Hokkaido IX. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 7: 128–135.
- 宮部 金吾・工藤 祐舜・須崎 忠助 1920-1931 北海道主要樹木圖譜，北海道庁，札幌。
- 宮部 金吾・工藤 祐舜・須崎 忠助 1932 北海道主要樹木圖譜 (再版)，北海道庁，札幌。
- 宮部 金吾・工藤 祐舜・須崎 忠助 1984 覆刻 北海道主要樹木図譜，北海道大学図書刊行会，札幌。
- 宮部 金吾・工藤 祐舜・須崎 忠助 1986 北海道主要樹木図譜 (普及版)，北海道大学図書刊行会，札幌。
- 宮部 金吾・三宅 勉 1915 樺太植物誌，樺太庁，札幌。
- 無署名 1918 (雑報) 開道五十年記念博覧會林業館内出品物の概況． 北海道林業會報 6 (8) : 31-38
- 無署名 1919 (雑報) 北海道主要樹木圖譜出版さる． 北海道林業會報 7 (6) : 37
- 須崎 忠輔抄録・筆 1929 修養之近道，須崎忠輔． 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1100980>
- 辻井 達一 1984 覆刻版 解説，宮部金吾・工藤祐舜・須崎忠助． 覆刻 北海道主要樹木図譜，北海道大学図書刊行会，札幌。
- Wilson, E. H. 1916 The conifers and taxads of Japan. Publications of the Arnold Arboretum No. 8. Cambridge, Massachusetts.

参考図版、「原画」一覧

各図版の植物名称は、各図版上部の表題を基本とし、加えられた修正などは記載していないが、種名の記載のないもの、明らかな誤りと認められるものについては適宜修正した。



いちみ・おんこ



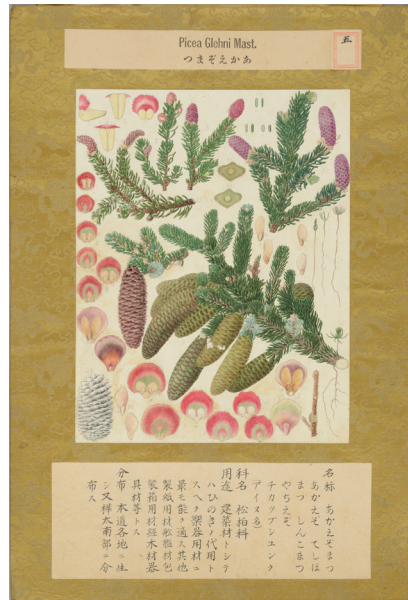
■松 (あかとどまつ)



とどまつ



からふとしらびそ



あかえぞまつ



たうひ・えぞまつ



ほのき



ひきざくら



のりのき



えぞのこりご・さんなし



ななかまど



あづきなし



かまつか



えぞのおほさんざし



しろざくら



えぞやまざくら



ちしまざくら



えぞのうはみづざくら



うはみづざくら



しうりざくら



いぬゑんじゆ



しころ・ひろはのきはだ



にがき



やまうるし



ふしのき



あをはだ



つりばな



まゆみ



をがらばな



からこぎかへで



めいげつかへで



やまもみぢ



みつでかへで



いたや



しなのき